

70年代階級闘争の 新たな飛躍にむけて

商学部学生会

講演 未定

29日 PM1:00 1 番教室

日本帝国主義者のアジア侵略に向っての大反動攻撃はいよいよもって、その全貌をむきだしにしつつある。我々は今こそアジア再侵略と総対決する日本プロレタリアート人民の戦列をガッチリと固めねばならない。

日帝は、70年元旦に到った民衆の昂揚が、日帝のアジア侵略との対決という内容において、その戦列を再構成され、いま各所でおこる民衆の反抗を包みこみ非妥協的資質をもった階級闘争の反撃の展開以前に、それをしりつばみに敗北主義的挫折に追いこみ、その力関係の下に排外主義・天皇制イデオロギーの大渦の中に民衆をのみこまんとしているのである。

とりわけ、沖縄入管が日帝のアジア再侵略を展開してゆくときの主軸にあるということのもっている意味をしっかりと踏まえねばならない。

もとより日帝にしてみれば、アジアに対する血の犠牲を強いる以外に生きられぬという日帝の帝国主義的存立の危機的構図の秘密をふたたび公然とさせる危険を意味しているのであるが、しかし我々プロレタリアートにとってそれは、侵略の劣兵と自からを化す危機を鋭く孕むものとなっている。

日帝のアジア侵略に屈し、そのもとに動員された歴史的経験をもつ日本プロレタリアート人民は、その根底的批判の階級的物質化なしにすごしてきた戦後的現実のもとで、今日「仕方がなかった」

ということから、「侵略は日本のために必要であった」「軍隊生活こそ充実した生活であった」などという把握と感性にいままた引きづり込まれんとしており、そうなれば、日帝アジア侵略を感じとる感性さえ堅持しえなくならんとしているのである。

かかる腐敗をたち切って日本プロレタリアートは二度と再び侵略を許さず、侵略に地すべりの陥まんとしている日帝を打ち倒すことができるかどうか問われているのである。

その決定的ポイントこそ、71年前半の攻防の主軸たる沖縄・入管の中で、日本プロレタリアート人民は真に侵略に対決する根底的批判の自覚の契機をつかみうるかどうかにかかっているのである。

我々は今こそ、第一に帝国主義に対する階級的敗北の責任を明らかにし、第二にその敗北の結果によって、アジア人民に対する侵略の直接の担い手として悪業をつくしたことの責任をえぐり出し、第三にその結果、依然として残っており、その解決の責任が問われているということをはっきりさせる闘いをなんといってもやりとげねばならない。

最後に三島反革命、右翼民族派を打ち破り、天皇制イデオロギーを打倒する闘いに全力を上げ、永続的自已解放の闘いに向けての決起をここに訴える。



祝 和 泉 祭

高 島 屋

専 属

東京配送株式会社

中央区日本橋兜町 3-53 TEL (666) 7857-8